

活動報告（平成 18 年）

1 戦争史関連研究会等

本年の戦争史関連研究会等は、特に今年の「特別研究」のテーマである「旧軍における捕虜の取り扱い」に関連して、捕虜問題研究に造詣の深い学者多数を招聘し、精力的に研究会を行った。また戦史部の主要行事である戦争史研究国際フォーラム「朝鮮戦争の再検討」では、6カ国の研究者による発表ならびに討議により多角的にこの戦争を解明でき、大きな成果を上げることができた。

戦史懇談会では、戦史研究・教育にたずさわる各自衛隊、機関の関係者が一同に会合し、戦史研究・教育の問題点等について活発な議論を行った。

戦争史研究国際フォーラム

題 目	朝鮮戦争の再検討	その遺産
実施月日	9月20・21日	場 所 グランドヒル市ヶ谷
基調講演	「朝鮮戦争と私 - 研究を回顧して - 」 慶應義塾大学名誉教授 神谷 不二	
特別講演	「私が経験した韓国戦争とその遺産」 元韓国陸軍参謀総長 白 善燁（ペク・ソンヨップ）	
研究発表	「韓国戦争と韓半島 - 社会・政治・イデオロギー的変革の視点から - 」 延世大学校教授 朴 明林（パク・ミョンニム）	
	「朝鮮戦争と日本 - アイデンティティ、安全保障をめぐるジレンマ - 」 防衛研究所戦史部第1戦史研究室長 庄司 潤一郎	
	「朝鮮戦争と中国 - 戦略、国防及び核開発への影響 - 」 北京大学教授 張 小明（ジャン・シャオミン）	
	「朝鮮戦争とロシア - 朝鮮半島政策への影響 - 」 ロシア科学アカデミー世界経済国際関係研究所 北東アジア安全保障研究センター長 バシリー・ミキーエフ	
	「朝鮮戦争とアメリカ - 戦争と内政 - 」 ニューオーリンズ大学教授 アラン・ミレット	

研究発表 (続き)	「朝鮮戦争とイギリス - 英米関係へのインパクト - 」 リバプールホープ大学教授 マイケル・ホプキンス
議長	防衛研究所戦史部長 加賀谷 貞司
コメント (順)	陸上自衛隊幹部学校戦史専門教官 葛原 和三 慶應義塾大学教授 安田 淳 防衛研究所戦史部第1戦史研究室教官 小谷 賢

【概要】

今年度のフォーラムは、「朝鮮戦争の再検討 - その遺産」と題して開催された。これまで朝鮮戦争に関しては、開戦経緯・原因、戦争の性格、冷戦史などの国際政治史、また陸戦、ゲリラ戦闘などの戦闘戦史の分野では多くの研究がなされてきたが、本フォーラムは朝鮮戦争がその後の関係国、及び世界に及ぼした影響について、軍事を中心に焦点を当てたものである。

「基調講演」では、神谷教授が、朝鮮戦争研究の回顧を語られ、「特別講演」では、韓国の白将軍が、陸軍参謀総長など要職におられた朝鮮戦争の実際の戦争体験と、その後の韓国軍に及ぼした影響について話された。

3つの「セッション」では、朝鮮戦争に関係した6カ国の研究者による発表と討議が行われた。朴教授は、朝鮮戦争が、韓国の政治体制の「権威主義強化」、社会の平等化・再統合など正負の遺産を残し、他方庄司室長は、朝鮮戦争の結果、日本において伝統的な安全保障の脅威が解消されると同時に、「国内冷戦」というイデオロギー、ナショナリズムの分裂をもたらしたと指摘した。

張教授は、朝鮮戦争が中国の戦略、特に空軍の創設をはじめとする軍の近代化と核兵器の開発を促進したと指摘し、ミキーエフ博士は、「国防の3つの輪」というスターリンの安全保障理論における朝鮮戦争の影響に言及した。

ミレット教授は、米国にとって、朝鮮戦争は国内的にはほとんど影響は与えなかったものの、安全保障面では現在の様な軍事的超大国になる契機となったと、予算、議会面などから分析した。他方、ホプキンス教授は、英国にとって朝鮮戦争は関心外であったが、冷戦の枠内で米国と協調することにより、低下しつつあった国際的地位を高め、英米関係も強化されたと述べた。

「総合討議・議長総括」では、朝鮮戦争がいずれの関係国にとっても、質は異なるものの多大な影響を与えると同時に、その遺産は現在にまで及んでいると総括された。その意味において、現在の朝鮮半島の不安定な情勢を検討する上で、極めて現代的な示唆に富むフォーラムであった。

なお本フォーラムの内容については平成19年3月に『戦争史研究国際フォーラム報告

書』としてまとめられ、国会図書館をはじめとする図書館、公文書館等に寄贈する予定である。またその報告書の全内容が、防衛研究所のホームページ上の「戦争史研究国際フォーラム」<<http://www.nids.go.jp/exchange/forum/index.html>>に掲載される予定である。

戦史懇談会

実施月日	7月19日	場 所	防衛研究所
出席者	統合幕僚学校教育課長 越川 1 佐 陸上自衛隊幹部学校戦史教官室長 村澤 1 佐、同室室員 葛原 1 佐 陸上自衛隊研究本部第 5 課第 12 研究室長 片山 1 佐 海上自衛隊幹部学校第 4 教官室長 山崎 1 佐、同校第 4 研究室長 金子 1 佐 航空自衛隊幹部学校戦略戦史教官室戦史主任教官 源田 1 佐 防衛大学校統率戦史室長 高山将補 防衛研究所戦史部 加賀谷部長、庄司 1 室長、塚本 2 室長、大場主任研究官、山本所員、柳澤所員		

【概要】

戦史教育ならびに研究の問題点等について広範に議論が行われた。まず戦史教官の確保・育成について、各自衛隊の人事制度の中で、戦史教官のおかれている立場は非常に弱いこと、教官養成数が最低限であり、人事計画が破綻する危険を抱えていることなどの問題点が指摘された。戦史教官の計画的人事のため戦史教官職域で人事ピラミッドを作る必要性が認識された。

次に教育のあり方では、学生のニーズは現代戦争の戦史に集中しているが、歴史となっていないため教育が困難なこと、統連合作戦について教育できる教官がいらないことなどの問題点が指摘された。これらについては戦史部で統連合作戦の教官育成ができないか検討すること等が論じられた。

戦史研究成果の蓄積とその活用については、戦史部の研究内容が他機関・自衛隊にあまり知られていないことが指摘され、戦史部で情報発信のあり方について検討することとなった。

ミニ・シンポジウム

題 目	「軍事史研究と戦史編さんの将来」		
実施月日	3月27日	場 所	防衛研究所
基調報告	「軍事史の価値・歴史・現状・課題・挑戦」戦史部長 林 吉永		

研究発表	「戦史研究の現状と課題」戦史部第1戦史研究室長 庄司 潤一郎
	「戦史編さん等の現状と課題」戦史部第2戦史研究室長 塚本 隆彦
コメント	防衛大学校教授 戸部 良一

【概要】林吉永戦史部長の退官を記念して行われたミニ・シンポジウムで、「軍事史研究と戦史編さんの将来」に関して、多数の聴講者も交えた活発な議論が行われた。

各種研究会

月 日	題 目	講演者等
2 / 8~10	「カーチス・ルメイとアメリカの都市爆撃作戦」 「朝鮮戦争におけるエア・パワー戦略の探求」 「朝鮮戦争の国際的インパクト」	米国陸軍大学 歴史研究所長 コンラッド・クレーン
3 / 10	「9.11 前後のアメリカのインテリジェンス」	東京工科大学教授 落合 浩太郎
3 / 14~16	「朝鮮戦争とカナダ」 「カナダ軍の国際貢献」 「加米同盟」	カナダ国防省歴史・ 遺産部長 セルジェ・ベルニエ
8 / 3	「第二次世界大戦における日本軍の捕虜処遇に 関する 残虐記事 の公表と 人種 - 英国外務 省資料を中心に - 」	山梨学院大学教授 小菅 信子 東京女子大学教授 黒澤 文貴
10 / 6	「日本軍の連合軍捕虜の取扱いに関する一考察」	東京女子大学教授 黒澤 文貴 日本大学講師 喜多 義人
11 / 10	「捕虜の処遇と戦後和解」	山梨学院大学教授 小菅 信子
12 / 1	「旧日本軍の捕虜に関する国際法知識」	日本大学講師 喜多 義人 防衛大学校教授 真山 全
12 / 5	「アジア主義を問い直す」	学習院大学教授 井上 寿一 防衛大学校教授 戸部 良一